

Buddhist Music — Newsletter

佛教音楽

ニュースレター



浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター
本願寺仏教音楽・儀礼研究所
<http://www2.hongwanji.or.jp/ongaku/>

交流のひろば

仏教讃歌と一緒に歌う喜び
—— それは何物にもかえがたく素晴らしいご縁です

皆さんの活動を紹介するページです
投稿をお待ちしております

仏讃歌のチカラ

“感じとること”の大きな力——私は、仏讃歌を通して、いつもこのことに出遭う。

女性ヴォーカル・アンサンプルの形式で仏讃歌の演奏を初め、6年程経ちます。その間、メンバーの入れ替わりなどありましたが、現在、固定の3人と伴奏者（コーラスアンサンブル「フェリーチェ」）、という形で活動を行っています。演奏内容は、仏讃歌を中心に、歌の内容が仏讃歌に準ずるものを積極的に取り入れ、さらに場に応じて、童謡唱歌を交えるなどしてきました。



後藤さんとコーラスアンサンブル「フェリーチェ」のみなさん

佐賀教区神埼組浄光寺坊守 後藤 契子

会場としては、お寺を中心に施設や病院のホスピス病棟、幼稚園などに行かせていただいています。

信頼できる長年の音楽仲間とハーモニーを作り上げる喜びや、色々な方々との出会い・・・、たくさん得るものはあるのですが、一番にあげたい事は、“仏讃歌のチカラ”に出遭ったことです。歌いながらその歌詞に自らうなづき、感じたものを聴き手に伝え、感じてもらう。それが、仏讃歌の醍醐味です。そういう力が音楽にはあるのです。本来、宗教音楽にはそういう明らかな目的がある、と常々私は思っています。

ともすれば、仏讃歌に取り組むことは、自分たちだけの楽しみ（もちろんそれも大事な要素です）で終わってしまいがちですが、もう一つの“仏讃歌のチカラ”を、聞き手に感じとってもらえる演奏をめざして、たくさんの方々のご縁を結ばせていただきたいと思っています。



目次

* 交流のひろば — 仏讃歌のチカラ：後藤契子	p. 2
うたの旅 —— 晩秋の日本へ：斉藤光代	p. 3
* 資料庫から — 仏教洋楽人物プロフィール：讃仏歌の父 —— 野村成仁	p. 4
資料が語るあの時あの場所：讃仏歌だけの作曲家？ —— 野村成仁異聞	
歌ってみませんか：別れの歌（詞・前田芳雄 曲・野村成仁）	p. 5
* 情報コーナー — みる・きく・よむ：BOOK 飛鳥寛栗著『仏教音楽への招待』	p. 6
* 研究所だより	p. 6～8

晩秋の日本へのうたの旅は、笑いどユーモアにあふれた35名の団員と共に11月20日から始まった。“讃佛歌を通して、お念仏の輪をひろげてゆこう”という熱い思いがかなって、22日の御堂演奏会に参加する尊いご縁をいただいた。



初めて参加した2000年の折は、400名の参加者だったのが、今年は700名近くにふくらんで、全国のコーラスに対するご本山の意気と熱意が感じられた。行く先々で温かくむかえられ、懐かしい法の友との出遭いがあった。総御堂では、あみださまの光にてらされて指揮者、鈴木捺香子女史の全身からあふれるようなダイナミックでユーモラスな動きにすべてをまかせて6曲の讃佛歌を力強く、時にはやさしくうたいあげた。前列には、椅子も用意されて、足の不自由な方でも、安心して参加できる優しい心くばりがなされていた。その御堂演奏会がすんで、会場を本願寺会館に移してハワイ別院コーラスが紹介され、温かい拍手にむかえられ3曲を披露した。私たちがいつとはなしに“ご本山のカーネギー・ホール”と名づけたコンサートホールでの演奏は少しばかり緊張した。が、岡野フランセスの流れるようなピアノ伴奏、そしてコーラス全員のハーモニーで、1960年頃からハワイの日曜礼拝のおり皆で唱和されている詩を、ハワイ生まれの四世平良ジェニファーが作曲した“The Golden Chain of Love”を海外で初めて披露した。2曲目は、西田ジョイの澄んだフルートの調べにのせて人生のあるがままをうたった“Flying Free”、そして会場の応援をうけて“アロハオエ”のうたとフラでしめくることができた。ご本山の温かい心づかいで、素晴らしい舞台で歌うご縁をいただき、実り多いうたの旅の第一歩をふみだすことができたことは、私達の宝としてこれからも光り輝くことでしょう。又、車椅子に乗ったハワイからの高齢参加者への温かい手助け、“おかげさまで、有難う”と目を潤ませてお礼をいわれるその手のぬくもりから念願の御堂演奏会に参加できた喜びが感じられた。この一大イベントを企画準備してくださった多くのご本山の方々に心から感謝いたします。



翌23日は、ハワイ別院と姉妹提携の岐阜別院を訪れ、交歓昼食会にまねかれた。1991年6月23日に調印式が行われ、“念仏の輪をひろげること”を目的にずっと交流が続けられている。海外からの私たちを迎えるため、コーラス、婦人会のみなさんは、二、三日かけて自慢の郷土料理を作られたとか。美しく盛られたそのお料理から、岐阜のみなさんの心の豊かさ、温かさを感じた。言葉は違っても、ほどけさまを讃える気持ちはみな同じ、讃佛歌を歌ったり、民謡をおどったり、長岡晃澄輪番もフラを踊られるなど、最高に楽しいひとときでした。ひとつの絆で結ばれた法の友に、温かい拍手で迎えられ、名残おいしい拍手に送られて、岐阜別院をあとにした。

* * *

緊張からときはなたれて、“さあ、旅を楽しもう！”と安らぎムードがただようバスの中は笑いの渦につつまれた。岐阜市内観光、飛騨高山の合掌造りの家や民芸館、三の町通りの古い町並み、中村久子さんの寄贈された観音菩薩のある国分寺、宮川朝市で買い物、又買い物、日本三名湯のひとつにかぞえられている下呂温泉でいいお湯につかって気持ちも爽快。楽しい旅はつづけられた。江戸時代の主要街道だった馬籠では、“夜明け前”の島崎藤村の生家にたちより、ちょっぴり文学青年になってみたり、八百津では、人道の丘にたたずみ、6000ものユダヤ人をナチスの迫害からすくった杉原千畝領事の愛、勇気、心に多くの人が感動し涙した。愛知県犬山市では、紅葉の美しい静寂なたたずまいの茶室有楽苑、市内が一望に見渡せる犬山城、ハワイ館もある明治村、そして奈良へとむかい、東大寺、奈良公園でのんびりして大阪へむかった。最後は、華やかな宝塚歌劇をたのしんで、笑いどユーモアに包まれた9日間のうたの旅を終え、興味ぶかい話をいっぱい胸につつんで、29日無事ハワイにかえった。“讃佛歌をとおしてお念仏の輪をひろげてゆこう”という願いをこめた晩秋のうたの旅。“すばらしい旅”でした。

連載：仏教洋楽人物プロフィール 第5回

讚仏歌の父 —— のむらせいじん 野村成仁

研究員 山口 篤子

讚仏歌 —— 今日「仏教讚歌」として私たちが親しんでいる音楽は、かつてこの名で呼ばれていました。今回はその生みの親、野村成仁(1874-1947)のお話です。

《宗祖降誕会》《報恩講の歌》《みほとけにいだかれて》など、野村による仏教音楽作品は枚挙に暇がありません。しかし、彼はもともととはごく普通の音楽教師でした。その彼がなぜ、仏教音楽にかかわるようになったのでしょうか。

野村は東京生まれで、東京音楽学校師範部(当時は東京高等師範学校付属、現:東京芸術大学音楽学部)で音楽を学びました。そして1907(明治40)年、府立中学校の音楽教

師として京都に赴任します。ちょうどその頃、本願寺では日曜学校の活動が盛んになりつつあり、教材となるような新しい仏教音楽の創作も試みられていました。野村はその作業の中心となる作曲家として抜擢されたのです。まもなく彼は、宗門関係の平安中学校(現:平安高校)の教員となり、1915(大正4)年には『サンブツ歌』と題する曲集を発表。「児童用」につくられたこの本が評判になったことで、さらに「幼年用」「青年用」の曲集を出版しました。晩年は、創作活動こそ低調になったものの、日曜学校での讚仏歌指導に力を注いだといえます。

今日でも耳にする機会の多い野村の作品は、このような時代の流れの中で生み出され、歌い継がれてきたものなのです。

連載：資料が語るあの時あの場所 第5回

讚仏歌だけの作曲家? —— のむらせいじん 野村成仁異聞 常任研究員 福本 康之

上記仏教洋楽人物プロフィールにもあるとおり、浄土真宗において野村成仁は、讚仏歌の作曲家として紹介されてきました。しかし、それ以外の活動は?となると、仏教界においても、単旋律の讚仏歌作品しか知られていないこともあって、どうやら仏教音楽の世界でだけ活躍したセミプロの作曲家とされているようです。

ここに、野村の音楽家としての履歴を知る資料のひとつとして、1925(大正14)年に発行された『どうせいかいかいじんめいぼ同聲會會員名簿』があります。同書を繙くと、野村が、1895(明治28)年の7月期に東京音楽学校の師範科を卒業していることがわかります。最初の卒業生を送り出してからわずか10年しか経っていないとはいえ、東京音楽学校は当時の日本における西洋音楽の最高教育機関であり、しかもひと学年がわずか10人前後という状況から、野村が音楽のエリート教育を受けた人物であることも、この資料から読み取れます。

ご存じのとおり、京都に居を移し、平安中学校(現:平安高校)や京都女子高等専門学校(現:京都女子大学)で教鞭を執るようになってからの野村は、讚仏歌をライフワークとして、音楽活動の中心に据えています。しかしそれ以前は、1900(明治33)年発表の《軍艦唱歌》など、作品の発表を

初め、『輪唱複音唱歌集』(鈴木米次郎との共編)や『唱歌基礎教本』(吉田恒三、原田彦四郎との共著)などの楽譜集への作品提供や音楽教育教材の編纂に携わっており、実はすでに音楽家として独り立ちしていたのでした。

つまり野村は、讚仏歌という世界でしか生きられない音楽家だった、というわけではないのです。野村という当時気鋭の音楽家が、ようやく黎明期を脱しようとしていた仏教音楽の世界に身を投じ、讚仏歌という音楽ジャンルが確立され、そして今日までその作品が歌われ続けているということは、とても希有な縁としかいいようがありません。



《別れの歌》 (詞：前田芳雄 曲：野村成仁)

研究員 今小路 聡子



“別れの歌”といってまず思い浮かぶのは、どんな仏教讃歌でしょうか？
 一番多い答えは、《み仏にいだかれて》ではないでしょうか。哀愁を帯びたメロディーは、お浄土へ往かれた方への想いを聴き手にしみじみと訴えかけます。しかし、それとは趣を異にした“別れの歌”も存在します。1940(昭和15)年に本願寺から出版された『佛教讃歌集』に収められている、《別れの歌》という作品です。

作詞者の前田芳雄は、昭和初期に『さんぶつ歌物語』『聖者親鸞』などを著わし、また本願寺が刊行していた『ともだち文庫』の編集・発行を手がけました。作曲者の野村成仁(1874-1947)は、大正から昭和初期にかけて200曲にも及ぶ仏教讃歌(当時は「讃仏歌」と呼ばれていた)を世に

送り、讃歌集の出版や講習会を通して、仏教讃歌の普及と日曜学校の興隆に多大な貢献をした人物です。前出の《み仏にいだかれて》や《宗祖降誕会》、《報恩講の歌》なども彼の作品です。

歌い出しの「一樹一河のえにし」とは、「一樹の陰 一河の流れも他生の縁」=見知らぬ者同士が同じ木陰で雨宿りしたり、また同じ川の水を飲んだりするといった、どんな偶然の出会いも宿世の因縁であるという意の諺=から採られています。ご縁あって一堂に会した同心の仲間——その人々が心に感じる、仏さまのみめぐみの中で共に聞法に励む大きな喜びと、別れの名残惜しさが明るい曲調にのせて歌われます。

ご法座や研修会など、集いの終わりに歌ってみてはいかがでしょうか。

《 別れの歌 》

詞：前田 芳雄
 曲：野村 成仁

い ち じゅ い ち ー が の え ー に ー し さ え お
 と つ こ こ ー ろ に む ー つ ー み あ い あ
 ご り は つ き ね ど わ ー か ー れ ゆ く お

も い は と ー お く は ー る ー け き を ひ
 さ な じ こ こ ー ろ の み ー ち ー の と つ も すく

じ り の み ー あ ー と し ー た ー い き て く
 く せ の え ー に ー し お ー も ー お え と ば あ
 も や ま と ー お ー く わ ー か ー る と も お

お ん の み ー ち を ゆ ー く ー わ れ ら ひ
 あ よ ろ こ ー び な な ー み ー だ み つ な
 な じ こ こ ー ろ ろ み ー ち の と

も さ ら ば わ か ー れ ん に ー し ー ひ が し

- | | | |
|--|--|--|
| <p>1. 一樹一河のえにしさえ
 思いは遠く はるけきを
 聖の御跡 慕い来て
 久遠の道を 行く我等</p> | <p>2. 一つ心に むつみあい
 朝な夕なに はげみつつ
 宿世のえにし おもおえば
 ああ 喜びの涙みつ</p> | <p>3. 名残はつきねど 別れゆく
 同じ志願の 道の友
 雲山遠く わかるとも
 同じ心の 道の友
 さらば別れん 西東</p> |
|--|--|--|



■宗門長期振興計画より

世の中 安穩なれ

□親鸞聖人750回大遠忌法要 本山法要案について

2006(平成18)年4月、当研究所が「本願寺仏教音楽・儀礼研究所」として新たに発足して以来、〈現代に即応した法要・儀礼の創設〉のため、様々な取り組みをしてきました。中でも、「親鸞聖人750回大遠忌法要 本山法要」案については、式務部と共管して制作を進め、2007(平成19)年12月、本山総御堂にて、中間報告的に「試行会」を開催するまでに至りました。この際に内外から頂戴したご意見を踏まえて、式務部、当研究所それぞれの立場で、最終提案に向けて検討を行なっています。特に、当研究所では、

①伝統的声明や雅楽を重視しながら新しい音楽的要素を加えた法要案

②西洋音楽様式の楽曲を主体とする「音楽法要」案を提示しようとしています。

本紙第五号に掲載した鼎談『音楽法要について考える』で、「声明や雅楽は、決して力を失ったわけではありません」と述べました。この視点に即して、①の法要案は、素晴らしい伝統を引き継ぎ、門信徒の皆さんにも親しまれてきた声明・雅楽を残しながら、新しい要素を加えようとする試みです。

一方②の「音楽法要」案は、ほとんどすべてを西洋音楽様

式で行なおうとするものです。あらゆる年齢層の方が唱和できるよう、やさしくしかも感動的な内容にしたいと考えています。

両案ともに、宗祖親鸞聖人のお言葉を、共に味わい、讃歎することを重視しています。「正信念佛偈」に音楽を附し、僧侶が主導しながらも参拝者が唱和しやすいように、また、親鸞聖人のご和讃をやさしいメロディーで唱和できるように、様々な工夫を重ねています。法要案が決定された後には、普及のための活動を進め、法要に出仕される僧侶、そして門信徒の皆さんが、共に勤めできるよう努めていきたいと考えています。

2年以上に及んだ研究も、ひとまず成果としてまとめ、提示する最終段階となりました。前掲の鼎談で、小野功龍本願寺仏教音楽・儀礼研究所 所長が最後に述べた「お浄土を身近に感じることでできる儀礼づくり、そして自然とお念仏の湧き起こる儀礼づくり」、さらには、宗祖親鸞聖人のご生涯とご信心を喜び、讃仰する法要づくりをめざしています。2011(平成23)年、報謝の大音聲^{おんこゑ}が、修復された本山御影堂に響きわたることを念じながら。

情報コーナー

みる・きく・よむ BOOK

仏教音楽に携わって何年になるでしょうかねえ——一言では表せない、仏教音楽との長い年月、そして多くの経験が、本書の著者にはあります。

* * *

第一章は、四季折々の行事の中で歌われる、仏教讃歌の数々についてのエピソード。仏祖釈尊の誕生を祝う「花まつり」にはじまり、「宗祖降誕会」や「報恩講」といった浄土真宗の行事にちなんだ歌。そして「お盆」や「お彼岸」など、季節ごとに巡ってくる仏教行事の歌。数々の歌にまつわるお話が、仏教とともにある一年の生活を、改めて実感させてくれます。

第二章は、仏教讃歌の歴史をなぞる構成となっています。著者は、かつて『それは仏教唱歌から始まった』という書物において、何人かの人物(あるいは団体)の活動に沿って、仏教音楽の歴史を紹介されました。しかし、100年以上にもわたる仏教音楽の歴史は、たかだか一冊の書物で紹介しきれものではありません。本章には、前著で筆者が書ききれなかった、そして伝えなかった様々なエピソードが綴られています。

飛鳥寛栗著

『仏教音楽への招待』

第三章のタイトルは、「それぞれのご縁」。仏教音楽には、数多くの作品がありますが、その作詞者や作曲者の多くは、必ずしも初めから仏教音楽を志していた

わけではありません。ある人は家が仏教だから、ある人は音楽仲間を通して...、仏教音楽との出会いはそれぞれです。そこに生まれた様々なご縁が、仏教音楽を愛する著者ならではの視点で語られています。

* * *

幼少期に日曜学校で仏教音楽と出会い、すでに卒寿を過ぎた著者による三章だて60編のお話。どうぞ一読ください。

■BOOKデータ

飛鳥寛栗著『仏教音楽への招待』

2008年3月20日発行 本願寺出版社刊

税込価格1,575円 ISBN978-4-89416-400-0





□資料収集とアーカイブの構築

これまでもニューズレターでお伝えしてきました通り、当研究所では、仏教音楽関係の資料収集に努めて参りました。なかでも楽譜資料に関しては、作品単位で、のべ4600点を超すまでになっています。しかしこれらのうち、実際に購入し、演奏に用いることが出来るものは、ほんの一部です。また、楽曲として知られていないものも少なくありません。当研究所では、これらの資料を体系的に整理・保存し、宗門内外の皆様にご利用いただけるよう、宗門長期振興計画においてアーカイブ（資料庫）を設置し、2009（平成21）年度より順次公開の予定で作業を行っております。



のべ4600点を超える楽譜資料

□定本となる仏教讃歌集の編纂

現在仏教讃歌は、本願寺出版社より刊行中の仏教讃歌集をはじめ、各種聖典、教化団体の発行するパンフレットなど、様々な刊行物に掲載されています。しかし楽譜によって、前奏や伴奏が異なったり、調性に違いがあるなどの理由から、現場で混乱が生じているようです。時折研究所に対しても、どの楽譜を参照すればよいかという類の問い合わせが寄せられています。

このような状況に鑑み、当研究所では、宗門長期振興計画の一環として、宗門において基準となる楽譜を定め、それらを総合的な定本となる仏教讃歌集として編纂することとなりました。しかも本プロジェクトでは、単なる楽譜集の編纂にとどまらず、各楽曲に対し、作詞者および作曲者による原本（あるいはそれに類する資料）まで遡った、学術的な批判校訂作業を、専門家の協力のもと行う予定です。

2007（平成19）年度は、左記アーカイブ事業において蓄積された資料をもとに、これまで各種刊行物に掲載されてきた作品の確認をはじめ、収録予定作品の絞り込み作業を進めて参りました。2010（平成22）年の刊行に向け、2008（平成20）年度は、具体的な批判校訂を中心とした編纂作業に着手いたします。

□御堂演奏会の名曲集を制作中

1989（平成元）年に、秋の法要の布教大会記念演奏会として始まった御堂演奏会も、2008（平成20）年で20回目を迎えることとなります。これまでに同演奏会でとりあげた仏教讃歌は、すでに50作品を超え、毎年発行しております楽譜集は、様々な機会での演奏において活用いただいております。

また研究所には、常日頃より以前の御堂演奏会で採りあげた作品の楽譜を希望される声が寄せられております。しかし、毎年御堂演奏会に合わせた楽譜の出版であったため、再版することが出来ず、また著作権の関係から

複写にての提供もままならない状況が続いております。

このような状況に鑑み、当研究所では、これまでにとりあげた作品のなかから、人気の高いものを中心に40作品（具体的な収録作品は、別掲のとおり）を選び、名曲集として刊行（2巻各20作品収録）することとなりました。またこの名曲集では、これまでに刊行となった御堂演奏会用の楽譜をもとに、一般的な合唱団での演奏形態にあわせ、ピアニスト一人で伴奏が可能ないように編曲を施しています（歌唱声部は2部のまま）。どうぞご期待ください（今秋刊行予定）。

【収録予定曲】（50音順）

青草は	ごおんうれしや	小さな灯	光りの中に
あの空みれば	こころのひと	千万の／み光りの	芬陀利華
ありがとう	コスモスの花	どこにもひかりが	ほほえみとともに
生きる	咲き匂う	なだめ	弥陀大悲の誓願を
いつか私は	衆会	Namo Amida Butsu	みほとけのほほえみに
いのち	成道の歌	名もない今日を	みほとけは
いのちかがやいて	しんらんさま	念仏	みめぐみの
いのちまいにちあたらしい	聖夜	のんのさま	やさしさにであつたら
憶念	そんな時私はくちずさむ	花のころ	山科の路
求道の歌	太陽からの手紙	ひかりあふれて	私の中に



□大正琴で仏教讃歌 — 楽譜セット第2期分発行

昨夏当研究所より発行いたしました仏教讃歌の大正琴用楽譜には、600セット以上の送付希望をいただきありがとうございました。その後も、他の作品の楽譜を希望される声が寄せられ、ここに第1期分同様、松浦裕代さん(兵庫教区網干組龍源寺門徒・大正琴指導者)のご協力のもと、第2期分の楽譜セットを発行・無料提供させていただくことになりました。楽譜をご希望の方は、研究所(下記連絡先)までお申し込みください。

【第2期(2008年3月)発行分】

恩徳讃[新譜] 宗祖降誕会 報恩講の歌
みほとけにいだかれて ひかりのなかに (以上5作品)

□本願寺合唱団 — 団員募集

本願寺合唱団は、当研究所の付置団体として、音楽監督兼指揮者に鈴木捺香子先生を迎え、本年度より新たなスタートを切りました。現在40名ほどの団員で、仏教讃歌の混声合唱曲を練習しています。次年度以降の活動の充実に向け、さらに団員を募集することになりました。皆様のご参加をお待ちしております。

【活動内容】

- ・ 定例研究会(通常練習)
原則毎月第1・3月曜日 19:00 - 21:00
本願寺第三庁舎2階 練習・視聴覚室
- ・ 主な演奏活動
大谷本廟総追悼法要(4月) 宗祖降誕奉讃法要(5月)
大谷本廟龍谷会(10月) 御堂演奏会(11月)
本山成人式音楽法要・御正忌報恩講奉讃演奏会(1月)
訪問演奏会(3月)など

□一緒に歌おう仏教讃歌 — 参加者募集

当研究所では、仏教讃歌に親しみ、ともに口ずさめる機会として、毎月一回「一緒に歌おう仏教讃歌」を開催しております。皆様の参加をお待ちしております。

【開催要項】

原則毎月第3水曜日 11:00 - 12:00(変更の場合あり)
本願寺聞法会館 1階 総会所
参加費：無料(楽譜等は会場にて配付)

□出演団体募集

—— ご本山で歌ってみませんか

当研究所では、本願寺での法要や行事の折に、門信徒の皆様とともに仏教讃歌に親しむ機会として、ロビー・コンサート(聞法会館)や「仏教讃歌のひとつき」(総会所)を開催しております。これまで試験的に、本願寺合唱団や本山近隣教区の合唱団に出演いただいて参りましたが、2008(平成20)年度より、広く全国で活動されている合唱団から出演団体を募集いたします。各合唱団からのご応募をお待ちしております。

【2008(平成20)年度開催予定】(募集状況は3月現在)

◆聞法会館ロビー・コンサート

〔春の法要期間中〕

4月13日(日) 12:20 - 12:50 ●募集終了

〔勝如上人7回忌法要期間中〕

6月13日(金) 11:30 - 12:00 ●募集終了

〔秋季彼岸会期間中〕

9月20日(土)～23日(火)
いずれも 12:20 - 12:50 ○募集中

〔春季彼岸会期間中〕

3月19日(木)～22日(日)
いずれも 12:20 - 12:50 ○募集中

◆総会所(聞法会館1階)「仏教讃歌のひとつき」

〔御正忌報恩講法要期間中〕

1月10日(土)～12日(月)・14日(水)
いずれも 12:20 - 12:50 ○募集中

※募集に関する詳細およびお申し込みは、研究所までお電話ください。



滋賀教区仏教婦人会コーラス「響流」



仏教讃歌を歌う会(大阪)

2008(平成20)年御正忌期間中「仏教讃歌のひとつき」の模様

■編集後記

お待たせしておりましたニュースレター第6号、漸くの発刊となりました。私事ではございますが、大学時代に音楽を専攻していました。音楽を専門とする大学で、様々なジャンルの音楽を聴いてきましたが、「仏教音楽」については、残念ながら授業で学ぶことは無く、話題に出てくることすらありませんでした。そのような私が、仏教音楽・儀礼研究所の担当として、1年と4ヶ月が経ちました。担当になり「仏教音楽」を聴く機会も増えた今、その作品の多くが、実は、幼い頃よく自坊の本堂で聞いていたものであることに、気づかされました。仕事で落ち込んだ時など、仏教音楽を聴いていると、幼少時を思い出し、なんとなくではありますが、仏様に見守られているような感じがして、心が楽になります。もしかしら、仏教音楽とは、「心のふるさとの歌」なのかもしれません。多くの方に、仏教音楽を聴いていただき、お寺で遊んだことなど思い出していただければ…。
(事務局 S)

『佛教音楽 ニュースレター』 第六号 (3巻2号)

編集 本願寺仏教音楽・儀礼研究所
<http://www2.hongwanji.or.jp/ongaku/>
発行 浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター
所長 上山 大峻
〒600-8349
京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92番地
本願寺第3庁舎内
TEL. 075(371)9244 FAX. 075(371)5761
発行日 2008(平成20)年3月31日
頒 価 無料